

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③④

信心は「虚無の身・無極の体」

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第83回から85回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第83回では「随意所欲」等について、第84回では「正定聚」等について、85回では「第十一願成就文」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第81回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■浄土の存在はみんな同じ

浄土の存在は、「ことごとく同じく一類にして、^{かたち}形異状なし」（『真宗聖典』39頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。われわれがこの世を生きている身体、精神というものは、宿業因縁を受け一人ひとり違います。その違う宿業因縁を生きるがゆえに、孤独地獄に苦しんだりするわけですが、浄土に触れるとみんな同じだと。これは何を象徴しているのかというと、本願こそが自分の主体だという生活をするならば、本願がもし身体というものをもつならば、みんな同じだと。如来の智慧をもって命とする、そういうものがもし命だと言えるなら、それはみんな同じだと。

こういう言葉を信頼することが浄土というものを生み出すのではないかと思うのです。われわれが生きている現象世界はみんな違います。無理矢理同じにしても必ず無理がくる。それでぶつかり合うわけです。だけど、どこかで根源的には同じものに触れなければたすからない。でも、それを

求めて得られないわけです。曾我量深先生は、求めて得られないのが方便化身土だとおっしゃった。人間は違いを強調するけれど、それでは孤独だからやっぱり平等とか共同とか一緒にということ并要求する。要求するけれども虚偽である。こういう矛盾があります。その矛盾を破って、本当の平等は無限大悲にあると。無限大悲に触れるところに平等の救いがあると。僧伽^{サンガ}というものは、そういうことを信頼するのが僧伽だと私は思いますから、本願を命とするなら、本願において深い連帯が成り立つわけです。

■無限大の身体、形なき形としての信心

それで、浄土の存在は「自然虚無^{じねんこむしん}の身、無極^{むごく}の体を受けたり」（『聖典』同上）と。身というけれども虚無だと。体というけれども極まりがない。つまり、浄土というとは何かこの世に生きているのと同じ形が浄土に往つてもあるようなイメージをもつけれども、そのようなものはないのだと。形といっても、虚無、ないのだと。極まりもないのだと。

だから浄土という場所も、浄土に生まれるというのも、生まれた身というものも、みんな譬喩^{ひゆ}的表現で、われわれが執らわれている在り方を破った在り方に帰ることを呼びかけている。全部、象徴的表現だということが、浄土の教えの特徴ではないかと思うのです。それを実体化してしまうものだからわかりがなくなる。場所も実体化するし、生まれてもまだ実体があるように考えている。人間は執着が深いですから、身体がなくなっても靈魂は残るだろうとか。そう語っているのが

浄土ではないかと、人間の思いをそこに入れ込むわけです。それは全部方便化土です。方便化土は求めて得られない。本当の真実の世界は光の世界であり、精神が^{ひるがえ}翻された明るみの世界です。本願に触れて無量光の世界に生まれる。生まれるということも、これも実体的に何か違う世界に生まれるというイメージが強いわけですがけれども、死して生まれるという宗教的な命に触れるということは、そうではない。執らわれの世界に死んで、新しい、解放された、宗教的な世界に生まれるのです。

この愚かな身、凡夫の命として、われわれは違う命、違うものに執着しているけれども、本願はこの愚かな衆生を平等に摂め取りたいという願ですから、本願を信ずることにおいて、その願においての平等、「願海平等」（『聖典』242頁）を信ずる。これを「大信海」（『聖典』236頁、356頁）、信心の海をいただくことだと親鸞は言うわけです。本願が無限なる命を呼びかけてきているのだと聞いて、本願を主体にする。つまり信心を主体にするということは、本願を信ずる信がわれわれの主体だと確認できるということです。もしそうなったら、その主体は信心が主体で、信心が浄土に生まれる主体ですから、信心が身体をもつといっても、その形は「虚無の身・無極の体」、無限大の身体、形なき形、そのようにしか言えないのだと思うのです。

そうした形なき世界に、我執のままで、骨がついて、肉がついたままで往けるかといったら往けないから、生まれ直しだと、死んでからしか生まれられないと教える。でも、その教えは、文字通り死んでもう一度生まれるということではなくて、何か立場が翻る。つまり、無明の在り方から本願の在り方に立ち直す。「心を弘誓の仏地に樹て」（『聖典』400頁）と。弘誓の仏地に立った身体というのは、「虚無の身・無極の体」なのでしよう。真仏土の主体は本願で、阿弥陀は無限大だと言ってもよいし、念ずる人のところにあると言ってもよい。それは形がないのでしよう。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2015年8月～10月）一抄出—

■ 2015年

- 8/3 第28回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
第84回（通算第135回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
人事発令：松扉達主事、大谷綾書記補が発令
- 8/10 第1回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 8/11 第178回英訳『教行信証』研究会
- 8/19 第157回清沢満之研究会
- 8/20 ご命日のつどい
第15回『西方指南抄』研究会
- 9/6 第74回日本宗教学会学術大会（創価大学）
藤原研究員発表「専修念仏批判への応答—親鸞
の『弁証論』引用の一側面—」、名和研究員発表「西
田幾多郎と『教行信証』」
- 9/9 第29回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 9/11 ご命日のつどい
第2回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 9/17 第158回清沢満之研究会
- 9/19 日本印度学仏教学会（高野山大学）
藤原研究員発表「親鸞の末法観と『弁証論』」、
中村研究員発表「懐興『観経疏』復元の試みとその
思想的意義について」
- 9/25 第179回英訳『教行信証』研究会
- 9/28 第16回『西方指南抄』研究会
- 10/2 日本倫理学会 第66回大会 ワークショップ
「日本近代における『宗教哲学』の源流と形成」
名和研究員発表「『悲』の宗教哲学—清沢満之
と西田幾多郎—」
- 10/7 第3回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 10/9 ご命日のつどい
第85回（通算第136回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 10/19 第180回英訳『教行信証』研究会
- 10/23 第158回清沢満之研究会
- 10/26 第30回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 10/27 第17回『西方指南抄』研究会
- 10/30 第159回清沢満之研究会「清沢満之における儒
家的言語の意義について」大阪大学名誉教授：子安
宣邦氏（千代田区・AP東京八重洲通り）